

福島 亮

### 1. はじめに なぜ詩人たちは動員されたのか

1939年6月、パリのボナパルト通りで一つの雑誌が刊行された。表紙には赤い文字で『シャルパント』(CHARPENTES)と書かれ、その下には「フランス語月刊誌」とある。月刊とは言いつつ、続く第2号は7・8月合併号である。結局、この第2号を最後に『シャルパント』の消息は断たれた。同時代状況に目を向けるならば、翌9月にはドイツがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦の火蓋が切られる。このように情勢が不安定になるなかで、『シャルパント』の刊行が困難になったと推測することは可能だろう。そしてこの雑誌を刊行しようという1939年6月の企図は、一見したところ、1939年8月をもって途絶えたように見える。

だが、ことはそう単純ではない。わずか二号で途絶えたこの小さな「フランス語月刊誌」はこれから見ていくように、巨大な企図の下にある雑誌だった。「帝国(Empire)」という企図である。帝国は中心(フランス本国)に対する周辺(植民地)を総称する概念だ。『シャルパント』は植民地出身の詩人たちの作品を掲載した雑誌だった。そのような詩人たちの中には、戦後『植民地主義論』で苛烈な植民地主義批判を展開したマルチニク出身の詩人エメ・セゼールの名も含まれていた。なぜ『シャルパント』は植民地の詩人たちを動員する必要があったのか。本稿で考察を試みるのはこのような問いである。以下では、まず、『シャルパント』の編集方針について述べ、次いで植民地の詩人たちの動員について、セゼールに焦点を絞って論じてみたい。

### 2. 『シャルパント』の編集方針

実際に『シャルパント』を手にとってみると、この雑誌の目的は第一に「地方(les provinces)とフランス植民地、およびフランス語を用いる

国と我々の文化を受け入れる海外の主要都市をつなげる役目を果たすこと」であると宣言される<sup>1</sup>。その上で、『人間』に生きる動機を与えなおすこと<sup>2</sup>や「言葉にその真の力、すなわち行為の原動力を返すこと」などが挙げられている。内容に目を向けるならば、「ユマニスム(humanisme)、や「人間(l'homme)」といった言葉が強調されている。もっとも、「ユマニスム」や「人間」について、刊行メンバーの間で統一的な意見が共有されていたとは言い難い。刊行メンバーの一人である詩人のロジェ・アロは「人間、つまりは感性を持った存在であり、戸籍による結びつきとは別の結びつき(attaches)を持っている」と述べ、「人間」とその「感性」に力点を置いている<sup>2</sup>。他方、リュシアン・コンベルは「人間がユマニスムに取って代わってからというもの、不完全なるものが完全なるものにとって代わったことを誰が否定しようか」と述べ「ユマニスム」を強調した上で、「ユマニスム」から「人間」への「繋ぎ(liens)が絶たれてしまった」ことを嘆き、ラシーヌやソフォクレスといった先人たちの忘却した「人間」の「傲慢」を非難している<sup>3</sup>。このように、「ユマニスム」や「人間」に対する刊行メンバーの統一的な見解を抽出することは困難である。ただ、少なくとも現時点で言えることは、アロにしるコンベルにしる、「結びつき」や「繋ぎ」という言葉を用いることで、「人間」を個人単体ではなく、言語的・歴史的連続性を持ち、紐帯を維持する集団として認識しているということである。そしてこれは、『シャルパント』全体を通して見られる認識である。

ここまでをまとめるならば、『シャルパント』にとって問題となるのは二つの紐帯であった。一つは空間的な紐帯、すなわち本国と植民地およびフランス語を介して意思疎通できる地域との紐帯である。もう一つは時間的・感性的な紐帯であり、こちらは「人間」や「ユマニスム」に対する反省によって導かれるものである。

### 3. 帝国と『シャルパント』

上記のような目的のもと、『シャルパント』は「フランス本国(France métropolitaine)」とは別に、11の地域を項目立て、その地域の詩を紹介している。11の地域とは、「北アフリカ」、「ブラック・アフリカ」、「マダガスカル」、「インドシナ」、「ベルギー」、「カナダ」、「エジプト」、「ハイチ」、「ルクセンブルク」、「ルーマニア」そして「スイス」である。「ブラック・アフリカ」という項目で紹介されているのは、セゼール訳と記されたブラウンの詩「強い男たち」(Les Hommes Forts、元のタイトルはStrong Men)、サンゴールの「パリに降る雪」(Neige sur Paris)、そしてダマスの「最初の時代に」(Aux Premiers Ages)の三編である。一目瞭然だが、この中で「ブラック・アフリカ」の詩と呼びうるのはサンゴールの詩のみである。ブラウンに至っては合衆国の詩人であり、もとはフランス語の詩ですらない。おそらく、編集者の意図は、「ブラック・アフリカ」の詩人を正確に紹介することにあつたのではなく、肌の色も出身地も違う人々が創作した詩が持つ多様性をフランス語で紹介することにあつたのだろう。だが、なぜそんなことをする必要があつたのか。

先に述べた空間的な紐帯から考えるならば、『シャルパント』は帝国を前提としていたということが指摘できる。目的として掲げられた言辭からもわかるように、この雑誌が行なおうとしたことは、帝国とフランス本国の紐帯をフランス語で書かれた詩の列挙によって示すことであつた。『シャルパント』の巻末に付された広告はこの雑誌にとって帝国が持つ重要性を如実に示している。雑誌の最終頁には、マルセイユからダカールを通して南米(リオ・デ・ジャネイロやブエノス・アイレス)へと渡ることができると謳う海運会社の広告、プランテーションで作られたラム酒の広告、そしてバナナの広告が掲載されている。また、裏表紙には一面を使って、当時出回り始めたフィルターつきタバコ「アニック」の広告が掲載されている。これらの広告はいずれも植民地がもたらす恩恵を伝えるものである。『シャルパント』が前提としているのは、このように、フランス本国にとって輸送の面でも食物生産の面でも、また嗜好品の面でも欠かすことのできない存在としての帝国であつたのだ。そして、こ

の帝国を文化の面で繋ぎとめておくために、詩人たちは動員されたのである。

#### 4. エメ・セゼールと『シャルパント』

ところで、エメ・セゼールが翻訳したブラウンの詩が『シャルパント』に掲載された事実には一考の余地がある。実は、セゼールの名が付されたこの翻訳は、1935年にすでに別の媒体に掲載されていた。在仏マルティニク学生協会の機関紙として刊行された『黒人学生』第3号においてである。ただし、1935年の時点では翻訳者の名はセゼールではなかった。アリストテッド・モーゼ訳、と明記されていたのである。モーゼは後にセゼールと雑誌『トロピック』を刊行することになる人物である。この事実は、1984年にマルタン・スタインの論文によって指摘されている<sup>4</sup>。また、セゼールの書誌情報を研究しているトマス・A・ヘイルも2013年にこの事実を指摘している<sup>5</sup>。だが、『シャルパント』そのものについて、この雑誌がどのような雑誌であったのか、この雑誌の刊行メンバーはどのような人物たちだったのか、という基本的な点については、管見によるならば、論じられていない。もっぱら『シャルパント』はセゼールの書誌情報として取り上げられるに過ぎなかった。確かに、ヘイルはセゼールが翻訳者であるという自説の証明を行っている。だが私たちにとって重要に思えるのは、ブラウンの詩を誰が翻訳したのか、という点ではない。むしろ目を向けるべきは、セゼールが『シャルパント』という場においてどのように機能していたのか、という点である。

『シャルパント』におけるセゼールの機能。この点について考えるうえで、同じ1939年8月にパリで刊行された雑誌『ヴォロンテ』第20号にセゼールの「帰郷ノート」が掲載されていたことは無視できない。『ヴォロンテ』誌を手にとってみると、レーモン・クノーやジャック・オーディベルティといった面々とともに、セゼールとサン

ゴールの詩が掲載されていることがわかる。また、スペイン語からの翻訳によって、パブロ・ネルーダやオクタビオ・パスの詩が掲載されていた。今日の眼で見ると、文学の大家とともに20代のセゼールと30代前半のサンゴールの名が掲載されているのは、驚くべきことだ。フォンクアも述べているように、セゼールの「帰郷ノート」が『ヴォロンテ』誌に掲載されたのは、高等師範学校の教師であったピエール・プティボンが書き直しを勧めたことに多くを負っている。また、『ヴォロンテ』誌の編纂を行っていたジョルジュ・プロルズンが雑誌への掲載を認めたことが、「帰郷ノート」の誕生を可能にした。

ここに一つの人間関係が認められる。プティボンとプロルズンは、『シャルパント』の刊行メンバーでもあったのだ。この二人について、フォンクアは興味深い仮説を提示している。彼が目をつけるのは、「帰郷ノート」が掲載された『ヴォロンテ』の刊行メンバーがヴィシー政権下で、「コラボラシオン(対独協力)」に加担していたという事実だ。とりわけ、『ヴォロンテ』を編集していたジョルジュ・プロルズンはヴィシー政権時代にプロバガンダの作成に携わっていた。このような事実を踏まえた上で、フォンクアは、セゼールの詩がナショナリズムに奉仕する詩として解釈されたのではないか、という仮説を立てている<sup>6</sup>。フォンクアの説は、『ヴォロンテ』とナショナリズムを結ぶ線であるが、『シャルパント』においてセゼールに期待された機能は、当時のセゼールを取り巻く人間関係を踏まえるならば、この線の上にある。つまり、彼に求められた機能は帝国の紐帯を強め、そこに積極的に加担してく詩人としての役割であったのではないか。

#### 5. おわりに 『シャルパント』と帝国の詩人たち

これまで見てきたように、『シャルパント』は帝国を背景としつつ、その帝国の維持強化の

ために本国の外の詩人たちを動員した。そして、この帝国と本国との紐帯の維持強化は、1941年になると「国民革命」と名を変えて展開されていくことになる。『シャルパント』にセゼールの詩が掲載されたことが示唆しているのは、植民地出身者たちが文化の一翼を担えば担うほどに、その存在が帝国の重要性を際立たせてしまうという事態だ。もちろん、セゼールが帝国意識をどれほど持っていたのかは慎重に吟味する必要がある。すでに『黒人学生』において、同化に対する徹底した拒否の姿勢をセゼールは示していた。それを加味するならば、セゼールの名が『シャルパント』に掲載されているというだけの理由で、セゼールが能動的に帝国の重要性を際立たせるのに加担したというのは安直すぎる。ただ、重要なことは、1930年代のセゼールを取り巻くパリの言論の空間は決して単純なものではなく、いわゆる右翼や左翼といった立ち位置だけでは割り切れない場だったということである。かつこの場合は、植民地出身者だけで自足していたわけではなく、本国の白人もまたその場で網の目を構成していた。そして、その網の目は帝国という企図をひとつの縦糸として、1939年からヴィシー政権期までを通底する、言論の空間における詩人の機能という問題系を提示しているのである。

本稿では、主にセゼールに焦点を絞って論述した。しかし、『シャルパント』が刊行されていた場合は決してセゼール一人に還元できるものではない。また、『シャルパント』は本稿が焦点を当てた空間的な紐帯とは別に、時間的・感性的な紐帯もまた重視していた。この点が帝国の詩人たちとどのように結びつくのか。これらやり残した点については別稿で論じるつもりである。

<sup>1</sup> 『シャルパント』の見返しにはこの雑誌の目的が次のように記されている。「Servir de lien entre les provinces et les colonies françaises, les patys de langue française et les centres étrangers qui accueillent notre culture.»

<sup>2</sup> Roger Hallot, « Carence de la Société », *Charpentier*, n° 1, juin 1939, p. 11.

<sup>3</sup> Lucien Combelle, « Retour à l'humanisme », *ibid.*, p. 3.

<sup>4</sup> Martin Steins, « Nabi nègre », Ngai et Steins, *Césaire 70*, Paris, Silex, 1984, p. 230.

<sup>5</sup> Thomas A. Hale, « Césaire face aux défis de la traduction : l'exemple de "Strong Men", poème de Sterling Brown » Aimé Césaire, *Poésie, Théâtre, Essais et Discours*, Albert

James Arnold (coordonateur), Paris, Dakar, CNRS et Présence Africaine, 2013, p. 1603-1612.

<sup>6</sup> Romuald Fonkoua, *Aimé Césaire*, Paris, Perrin, 2010, p. 81.